研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-131		20-053	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　三浦克之

題名（原題／訳）

Associations of prenatal alcohol exposure and offspring harmful alcohol use: findings from the Raine Study

胎児期のアルコール曝露と将来の有害飲酒の関係：Raine Study からの知見

執筆者

Duko B, Pereira G, Betts K, Tait RJ, Newnham J, Alati R.

掲載誌

Drug Alcohol Depend. 2020 Dec 1;217:108305. doi: 10.1016/j.drugalcdep.2020.108305.

キーワード	PMID
胎児期　アルコール曝露　有害飲酒	33032247

要　旨

目的：胎児期にアルコールの曝露を受けた子供は、成人後に問題飲酒のリスクが高くなることを示唆する疫学的証拠がある。しかし、青年期における問題飲酒のリスクに関しては明らかでない。本研究は胎児期（妊娠第 1 期および第 3 期）のアルコール曝露が 17 歳時の問題飲酒と関連するか検討した。

方法：1989～1991 年に 16-20 週の妊婦健診を受けた妊婦からなるオーストラリアの多世代出生コホート研究、Raine Study のデータを用いた。本研究ではデータ欠損を除いた 1200 組の母子を対象とし、胎児期のアルコール曝露と 17 歳時の問題飲酒リスクとの関連を検討した。ログ二項回帰分析を用い、妊娠第 1 期および第 3 期の胎児期に母親の飲酒曝露を受けた子供の問題飲酒リスク（RR）を推定した。また、母親の妊娠前の飲酒行動を胎児期のアルコール曝露のネガティブコントロールとした。

結果：交絡因子を調整後、アルコール 4 ドリンク／週以上摂取する母からの出生児は非飲酒の母からの出生児に比べて 17 歳時の問題飲酒リスクが高く、妊娠第 1 期で RR 1.45（95%信頼区間[CI] 1.08-1.93）、第 3 期で RR 1.34（95%CI 1.04-1.72）、両期にまたがる場合 RR 1.86（95%CI 1.16-2.96）であった。母親の妊娠前の飲酒行動は、子の問題飲酒のリスク増加と関連していなかった　（RR 1.15 [95% CI: 0.89-1.48]）。

結論：胎児期のアルコール曝露は子の青年期の問題飲酒と関連が見られたが、母親の妊娠前の飲酒とは関連が見られなかった。これは胎内でのアルコール曝露が生物学的に問題飲酒のリスクとなっている可能性を示唆し、妊娠期の飲酒を控える推奨を支持する結果である。